

# ダビデ王とテコアの知恵ある女 (サムエル記下 14 : 4-20)<sup>1</sup>

ジョナサン・マゴネット  
日原 広 志 (訳)

ユダヤ教の伝統では、説教の代わりに、聖書本文の検証に専念する勉強会であるデラーシャー [דרשה]<sup>2</sup>を行うことが好まれます。今回は、サムエル記下14章から、私を悩ませた短い章句を取り上げることにしました。ダビデ王の生涯を描いた長い物語の一部なのですが、二人の人物の対話で物語を中断しているのです。しかし、この対話は非常にうまく書かれているので、二人が互いに言っていることだけでなく、その水面下で何が起きているのかを理解するよう私たちに挑んでくれます。まるで演劇の一場面の台本のようで、舞台演出はほとんどなく、二人の主人公に命を吹き込むのは、すべて役者次第です。

それは、ダビデ王が家族間の軋轢に深く悩まされ、人生のどん底にあるときに起こります。王として後継者となる可能性があった長男アムノンが、もう一人の息子アブシャロムの妹タマルを強姦した後、アムノンはアブシャロムに殺されてしまいました。ダビデはアムノンを喪ったことを嘆いていましたが、裁くことができないまま、アブシャロムも国外に逃れ〔いなくなっ〕てしまいます。普段は非常に積極的に活動する人物であるダビデが、これらの出来事によって麻痺してしまっているようでした。軍の司令官であるヨアブは、ダビデとアブシャロムの和解をもたらすために、自分が行動を起こさねばと決心しま

1 訳注：これは2023年5月8日、西南学院大学コミュニティセンターホールで行われた神学部チャペルでの公開講演である。原題は、“King David and the Wise Woman of Tekoa (2 Samuel 14:4-20)”。

2 訳注：以下、本文中の〔 〕は訳者による補足を表す。

す。かつてダビデがバト・シェバとの不義を認めることができなかつたとき、預言者ナタンはダビデの防御をどうにかすり抜けて真意が届くようなたとえ話をしました。そこでヨアブは同じようなアプローチを試すことにしました。彼は、ダビデの許へ赴かせ、真意が伝わりそうな架空の話を物語らせるべく、「テコアの知恵ある女」とだけ記された名もない女を雇います。ヨアブは、彼女が言うべき言葉そのままを彼女に授けさせました。

この女は危険な状況に陥っています。彼女は、その地で二番目の権力者であるヨアブによって、悪い知らせをもたらす使者を殺すと定評のある王の許へ、厄介なメッセージを伝えるように命じられてしまったのです。この女の知恵が大いに試されることとなります！

これが芝居の一場面だとしたら、ドラマチックな「上演」が今まさに本格的に始まります。4節冒頭の言葉が、すでに疑問を投げかけています。文字どおり、それはこう書かれています。

テコアの女は王に言った。そして、地に顔を付けてひれ伏し、「王様、お助けください」と言った。(サムエル記下14:4)<sup>3</sup>

「彼女は言った」を表すヘブライ語〔ותאמר〕は、文中に2回出てきます。最初は冒頭で、次は実際に彼女が懇願したときです。諸翻訳の中には、冒頭の「彼女は言った」を無視して、後の「彼女は言った」だけで済ませるものもあります。それも許容できる翻訳ではありますが、それにしても彼女は最初に何を言おうとしたのだろうかと感じずにはおれません。しかし結局彼女は口をつぐみ、次に話を続ける前に、王に対する正式な敬意の行為として地面にひれ伏しました。おそらく、彼女はごく普通の挨拶の言葉から始めてみたものの、王の反応に何かを感じたか、あるいはまったく何の反応さえもなかったので、より劇的な動きをしようと決心し、王の注意を引くために地面にひれ伏したので

---

3 訳注：本節冒頭の「に言った。そして、」は講演者による。協会共同訳では「の前に出ると。」と訳出し、脚注に「七十人訳ギリシア語聖書による。底本（レンニングラード写本）『に言う』と記している。また以下、日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書 聖書協会共同訳』からのものである。

しょう。ここでようやく、彼女は直接的な挑戦ともいえる言葉で訴えたのです。「王様、お助けください!」と。

ダビデの最初の反応は最小限のものです。「あなたの問題は何ですか?」という英訳は、ヘブライ語の単音節の二語から成る「マー ラーフ」[מה-לך] — 文字通りには「お前のは何?」 — よりも、より深く引き付けられていて同情的です。それ[マー ラーフ]は単なる形式的なものとも、純粋な関心とも、あるいは、王の法廷でのただでさえ忙しい日にさらに[現れた]もう一人の請願者へのうんざりした応答とも取り得る言い回しです。あるいは、ダビデが諸々の責任を果たせていないことに対するヨアブの懸念が重く受け止められるべきであるとするなら、彼の言葉は、鬱屈した気分沈み、もはや王としての責任を果たせないでいる者ならでは、最小限の発言であるのかもしれませんが。さて、女の反応や如何に?

彼女の最初の言葉は、ヘブライ語では「アヴァール」[אבלי] で、通常は「しかし」を意味し、あたかも今言ったばかりのことを否定しているかのようです。中世のユダヤ教の注解者たちが引用したアラム語訳では、「実のところ」を意味し、あたかも彼女が自分の状況の深刻さを主張する必要を感じているかのようです。「私はやもめでございます」と言えば十分でしょうに、彼女はこう付け加えました。「そして夫は亡くなりました」と。ヨアブは既に〔2節で〕、喪服を着て、香油は付けないようにと要求していました。この組み合わせられた効果は、彼女が最近やもめになったばかりであることを強調し、おそらく彼女の要求に対する王の同情を即座に得るためだったでしょう。

彼女は続けます。

仕え女には二人の息子がおりました。ところが、二人は野<sup>4</sup>でいさかいを起こし、仲裁に入ってくれる者もなく、一人がもう一人を打って、殺してしまいました。(サムエル記下14：6)

---

4 訳注：「野」は講演者による。協会共同訳では「畑」になっている。

彼女の語るストーリーは、聖書に、あるいはカインとアベルの物語に詳しい人にとっては強く響くものです。

カインが弟アベルに声をかけ、二人が野にいたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。(創世記4:8)

類似点と相違点がとても多くあります。彼女のバージョンでは、争いは野で生じ、そこは傍観者も二人を引き離す者もない広い空間です。兄弟のどちらが相手を殺したかは明らかにされていないので、争いや殺人のはっきりした動機も不明です。彼女は、例えば正当防衛のために殺した場合など、法的には過失致死として認められ得る状況を説明しています。そのような状況では、民数記35章9-12節の法が適用されます。殺人者は、国内に設置された「逃れの町」の一つに逃げ込むことができるのです。そこでは、過失致死か故意の殺人かが審理されることになるでしょう。前者であれば、定められた期間、殺人者はその町で安全に過ごすことができます。このシステムは、殺された人の家族の誰か、いわゆる「ゴーエールハッダーム」「血の復讐をする者」〔גאל הדם〕による復讐殺人を防ぐために作られたものでした。犯人がまだ逃れの町の外にいる間は、捕えて殺したとしても、その者〔גאל הדם〕は罰せられません。このことが、やもめの話の背景にあるようです。彼女の息子はまだ母親と家におり、逃れの町まで逃げ延びるに至っていません。しかし次の7節で、やもめはまた別の次元を提供します。彼女は親族の言動を引用することによって切り出します。

その上、一族の者が皆、この仕え女を責めて、『兄弟殺しを引き渡せ。殺した兄弟の命の償いに彼を殺し、—〔講演者注〕この引用がどこで終わるのは明らかではないので、彼らの真の動機を説明する次の言葉を加えたのはやもめ自身である可能性があります—跡継ぎも絶とう』と申すのです。私に残されたおき火を消し、私の亡き夫の名も跡継ぎも、この地上に残さないようにしようとするのです。』(サムエル記下14:7)

彼女の主張は、息子を殺すことを正当化するために法を利用しておきながら、彼らには下心もあるというものです。夫の死と、唯一の生き残った息子の目の死の可能性によって、親族が夫の土地と財産を自分たちの間で分割してしまえば、嗣業の土地と夫の名跡が途絶えてしまいます。彼らが実際には正義ではなく、自らの貪欲に衝き動かされていると彼女は主張するのです。そのような状況では、事態を収拾するために介入できるのは王だけです。

「カインとアベル」との連想には、さらに別の次元があるかもしれません。カインがアベルを殺したにもかかわらず、神はカインを生かし、彼を殺そうとする者からカインを守るためのしるしさえ与えました。ダビデなら、この事態で神の代わりに行動することができそうです。

しかし、彼女の発言でもう1つ注目すべき要素は、「おき火を消す」ということわざのような言い回しが含まれていることです。彼女は14節でも、「私たちは、一度地にこぼれてしまえば、再び集めることができない水のようなもの」というこれに類した言い習わしを用います。これは、ことわざを用いることで自らの発言に権威を持たせるという、知恵ある女としての彼女の役割に相応しいものです。しかし、ダビデ王についての物語を読んだことがある人は、ダビデが寛容にサウル王の命を見逃したときのあの思いがけない出会いを思い出すでしょう。故なく自分を殺そうとするサウルを非難する際、ダビデは次のように言って自らの主張を補強しています。

古いことわざに、『悪は悪人から出る』と言います。私は手を下しません。

(サムエル記上24：14)

おそらく彼女は、ダビデを自分の側に引き入れようとする試みの一環として、ダビデ自身の、自らの発言を補強するために好んでことわざを用いる点に訴えかけようとしたのでしょう。

ダビデの答えは次のとおりです。

「自分の家に帰るがよい。私があなたのために命令を下そう。」(サムエル記下14:8)

この答えは、多くの問題を提起しています。額面どおり、彼女の話进行调查すれば、完全に作り話であることがわかるでしょう。しかし、それはダビデが簡単に彼女を引き下がらせるためのやり方かもしれません。そこで、彼女の防御策は攻撃を続けることです。彼女は、ダビデに期待する自分の事件への関与のレベルを上げます。彼女の次の言葉は誓いの形式をとっています。聖書の世界では、誓いは人や出来事に影響を及ぼす本物の力を持っているので、十分慎重に行われなければなりません。しかし、彼女の言うことは、聖書の別の文学的慣習の影響も受けています。そのため、まったく予想外の形式になってしまったのです。彼女は言います。

「王様。この過ちの責任は、私と私の父の家にあります。王様と王様の王位には何の責任もございません。」(サムエル記下14:9)

彼女が実際に言いたいのは、彼の不作為のせいで何か不具合が起こったら、その責任はダビデ自身にあるということです。しかし彼女は、ダビデを直接非難する代わりに、王への敬意から形式上自分自身に罪を負わせたのです。意図している人物の代わりに自分自身を置くこの種の婉曲表現は、他の聖書物語においても、民が自らを凌ぐ権力を有する人物の間違った行為に反論しなければならないときに見られます<sup>5</sup>。にもかかわらず、同時に彼女は、ダビデに期待する関与のレベルを効果的に上げているのです。

ダビデの反応は、彼が彼女の意図を完全に理解していることを示唆しています。

---

5 出エジプト記5章15-16節において、イスラエルの下役の者たちは、ファラオが労役を苛酷にしたと異議を申し立てる際に、ファラオではなく「あなたの民」[自分たち]を罪ありとしている。また、列王記上1章21節において、バト・シェバが、ソロモンを後継者と宣言しておかなかったことでダビデを「非難する」[場面における「私と息子ソロモンは、罪ある者となってしまおうでしょう」も参照]。

「あなたに対してあれこれ言う者がいたら、その者を私のところに連れて来なさい。そうすれば、二度とあなたを悩ますことはなくなるであろう。」

(サムエル記下14：10)

この譲歩を引き出せたので、彼女は、自分の要求を、彼女がこれまでそこを目指して頑張ってきた究極の水準まで引き上げます。彼女は言います。

「王様。どうかあなたの神、主を思い起こしてくださり、血の復讐をする者が殺戮を繰り返すことなく、彼らが私の息子の命を絶つことのないようにしてください。」(サムエル記下14：11)

そしてダビデは、彼女が期待した通りに、自らの正式な誓いで応じます。

「主は生きておられる。あなたの息子の髪の毛一本たりとも地に落ちることはない。」(サムエル記下14：11)

この成功を以て、彼女は息子をめぐる物語を完結させました。しかし、地固めが済んだ今こそ、彼女の命を危険に晒すべき時が、つまり、彼女がここに連れて来られた本当の問題を切り出すべき時が来たのです。明らかに、彼女はダビデの尊敬と、おそらくはそれ以上のものを勝ち取りました。今度も聖書の読者は、ダビデともう一人の「知恵ある」女、ナバルの妻アビガイルとの思いがけない出会いを思い出すことでしょう。ナバルがダビデの部下たちをひどく扱ったせいで、ダビデが彼女の家族を虐殺しようとしていたのを、彼女は知恵と外交術を駆使して防ぎました。ナバルの死後、ダビデはアビガイルを呼び寄せ、彼女を妻として迎え入れました(サムエル記上25章)。現下の物語では、テコアの女の容姿は何も記録されていませんが、ダビデの注目と尊敬を得たとされる今こそ、彼女はこう尋ねるのです。

「王様、どうぞ、あなたの仕え女に一言言わせてください。」(サムエル記下14:12)

ダビデは即答します。

「申してみよ！」(サムエル記下14:12)

彼女は一刻も無駄にせず、単刀直入にヨアブから託された任務の核心に触れ、直接王に挑みます。彼女がどれほど慎重に話したことかと、またしても思わずにはいられません。残念ながら、ヘブライ語本文はさまざまな解釈が可能なため、以下は一つの可能性です。

「あなたは、それならばどうして、神の民に向かってこのような事を図られたのですか。王は今この事を言われたことによって自分を罪ある者とされています。それは王が追放された者を帰らせられないからです。『わたしたちはみな死ななければなりません。地にこぼれた水の再び集めることのできないのと同じです。』しかし神は、追放された者が捨てられないように、てだてを設ける人の命を取ることはなさいません。』<sup>6</sup> (口語訳サムエル記下14:13-14)

この読みにおいては、彼女が言っているのは、同じように兄弟を殺したが法的に裁かれていない状況にある、彼女の息子の命を救う方法をダビデ王は見つ

---

6 訳注：講演者は RSV の読みを採用しているため、この章句のみ『聖書 口語訳』による。ことわざ部分の範囲を明示する引用符は講演者による付加。なお協会共同訳では「では、なぜ、王様は神の民に対して、私が先ほど申し上げたようなことをなさろうとするのでしょうか。王様は、先にご自分のところから追放した方を、連れ戻そうとはなさいません。王様のこの度のご判断によるなら、王様ご自身に非があることとなります。私たちは、必ず死ぬ者です。一度地にこぼれてしまえば、再び集めることができない水のようなものでございます。神は死んだ者を生き返らせてはくたさいません。しかしまた、追放された者が追放されたままにならないよう、取り計らってくださるのも神でございます。」となっている。

けることができるということのようです。アブシャロムのために同じようなことをすれば、神はダビデに恵みを示すに違いありません。彼女の話はすでに、自身の状況における家産喪失と家系断絶の可能性を強調していました。このことは、ダビデが王位継承に取り組まないことで、イスラエルの人々に与えている損害について言外にはのめかしています。ダビデから神への誓いを引き出しているのも、彼女は、彼がイスラエルを統治することは神の目的の一部である点についても、ダビデに思い出させているのかもしれませんが。

彼女が生き延びることができるかどうかは、彼女がこれらの言葉をどう表現したかに大きくかかっています。彼女は、アブシャロムの件を、自分の状況と重ね合わせて、まるで突然思いついたかのように、提起しようとしたのかもしれませんが。しかしダビデの怒りを招いたかもしれないので、彼女はすぐに元の話に戻します。しかし、もし彼女が本当に評判通りの知恵ある人なら、今しも彼女が語っていることの水面下で、おそらくさらに別の何かが起こっているでしょう。

彼女は「ヴェアッター」、「そして今」[ועתה]という言葉で始めますが、これは通常、その後が続くことが以前の交渉から導き出される結論であることを示します。

「今、私が参りまして、王様にこのようなことを申し上げるのは、人々が私に恐れを抱かせるからです。あなたの仕え女 [שפחה] は（自らに）言いました<sup>7</sup>。『王様に申し上げれば、このはした女<sup>8</sup> [אמה] の願いをかなえて

7 訳注：15節と16節に2回登場する「あなたの仕え女は（自らに）言いました」は講演者による。講演者はテコアの知恵ある女と動詞アマー「言った」[אמר]の結びつきに注目している。協会共同訳では「この仕え女は思いました」（15節）「仕え女は思いました」（16節）。

8 訳注：15節と16節に2回登場する「このはした女」は講演者による。協会共同訳ではいずれも「仕え女」。古代の身分制社会を背景にしたテコアの賢い女の台詞の内容（後述される女性の発言中における二つの謙遜表現シフハー [שפחה] とアマー [אמה] の併用）を考察する本講演の性質上、アマー [אמה] を、岩波訳に倣い、敢えて「はした女」と表記する。

くださるかもしれない。王様は<sup>9</sup>、聞き入れてくださり、私と私の息子を神の所有地から滅ぼそうとするあの男<sup>10</sup>の手から、このはした女 [אמה] を助け出してくださいに違いない。』また、あなたの仕え女 [שפחה] は (自分に) 言いました。『王様のお言葉は、私の慰めになるであろう。なぜなら、王様は神の使いのように善と悪を聞き分けられるからです。』あなたの神、主があなたと共におられますように。」(サムエル記下14：15-17)

彼女は、神が王と共にあるようにと華やかで敬虔な願いで以て締めくくります。しかし、彼女が早々にまた安全に立ち去るのを許すことなく、今度は王が、先に彼女が発言を求めたのと同じ作法に則った礼儀正しきで、彼女に尋ねる番になります。

「どうぞ、私がこれからあなたに問うことに、隠し立てをしないでください。」<sup>11</sup> (サムエル記下14：18)

それに対して彼女は答えます。

「王様、どうぞおっしゃってください。」(サムエル記下14：18)

ダビデの質問は極めて直接的です。

「あなたのしていることは、すべてヨアブの指示であろう。」(サムエル記下14：19)

---

9 訳注：協会共同訳では、ここに原文にない「仕え女の願いを」が意訳で挿入されている。

10 訳注：「あの男」は講演者による。協会共同訳では「者」。

11 訳注：講演者による。18 節前半では、王として命令できる立場にある筈のダビデが、12 節の彼女と同じナー「どうぞ～してください」[נא] を用いて決定を彼女の主体性に委ねている。18 節後半では、彼女も同じナーを用いて答えている。協会共同訳では「私がこれからあなたに問うことに、隠し立てをしないように」となっている。

もしこれが劇の上演であったなら、この瞬間の観客の緊張はいかばかりだったことでしょう。ダビデは、彼女がアブシャロムに言及したことで、ヨアブの懸念を認識したのかもしれませんが、この質問をしたときに彼が認識していたのはそれだけだったのでしょうか。さらに、彼はどのように尋ねたのでしょうか。ダビデは怒りにまかせて、女が何をされるかわからないと恐怖におののくように話したのでしょうか。それとも、彼女がたった今言ったことによって、彼女とダビデは、ヨアブが仕掛けたこのゲームにおける共謀者になってしまったので、微笑みながら、知っているような表情でそれを尋ねたのでしょうか。〔だとすると、〕彼女はすでに、自分の困難な状況をどうにかして言外にほのめかしていたのでしょうか。

彼女の締め言葉〔13節以下〕には、この可能性をうかがわせる特徴がいくつもあります。まず、彼女の発言の多くは以前から言っていることの繰り返しのようで、あまり必要ではありません。それにもかかわらず、この発言の中で、彼女が自分自身を指す呼び方には意義深い変化があります。ダビデとの会話を通して、彼女は自分のことを「シフハーテハー」「あなたの仕え女」〔שפחה〕とここまで5回呼んでいます<sup>12</sup>。〔しかし〕彼女が、何が自分に王と話す決心をさせたかを思い起こすときだけ、彼女はそのことについて三人称で話し、〔シフハーテハーの〕代わりに自分自身を「アーマー」「はした女」〔אמה〕と呼ぶのです。それはすでに、彼女がフリーエージェントとして行動しているのではないことを示唆しています。

『王様に申し上げれば、このはした女〔אמה〕の願いをかなえてくださるかもしれない。王様は、聞き入れてくださり、私と私の息子を神の所有地から滅ぼそうとするあの男の手から、このはした女〔אמה〕を助け出してくださいに違いない。』(サムエル記下14：15-16)

12 訳注：サムエル記下14:6, 7, 12, 15, 17の5回。その後19節でも。

それまでは、親族全体が息子に敵対していると話していましたが、今は、「彼女と彼女の息子」を滅ぼそうとする一人の「男」について言及しています。もし彼女が「血の復讐をする者」のことを言っているのならば、その者は息子を殺すかもしれないが、彼女には何の危害も加えることはできない筈なのに、なぜこの男によって彼女自身の命が直接脅かされていると言うのでしょうか。さらに「王様は、聞き入れてくださり、…このはした女を助け出してくださるに違いない」という表現も、王が、彼女は今何を言っているかについて、非常に注意深く耳を傾けるべきことを示唆しています。

しかし、最後の興味深い要素は、ダビデを「善悪を聞き分ける神の使い」のようだと呼んでいることです。明らかに大げさなので、王の御前にいるわが身に気づいた農婦によって経験される今更ながらの畏怖の念として済ますことができるかもしれません。しかし、彼女はそういう人ではないので、これもやはり、ダビデは表向き彼女が言っている裏にあるものを見抜いて、神の使いのように、ヨアブによる脅威が本当に彼女に迫っていることを聴き取るべきだ、という更なる言外のほめかしになっているのです。

ダビデの反応は、彼が、彼女の置かれた複雑な状況を理解したと、彼女にあらためて保証するものだったに違いありません。彼女の最後の言葉は、ダビデがそれを理解してくれたことへの安堵の表現であり、彼女が与えてきた諸々の手がかりを拾い上げてくれたダビデを本当に祝福するものです。

「王様、あなたは生きておられます。何もかも、王様の仰せのとおりでございます。右にも左にもそらすことはできません。確かに、あなたの家臣ヨアブその人が私にこれを命じ、彼こそが<sup>13</sup>申し上げるべき言葉を仕え女の口に授けたのです。あなたの僕ヨアブは事態を変えようとして、このようなことをしたのです。王様は、神の使いのような知恵に満ち、地上

---

13 訳注：「彼こそが」は講演者による。

に起こるすべてのことをご存じでいらっしゃいます。」(サムエル記下14：19-20)

この言葉を残して彼女は舞台から去り、おそらく無事に、また相応しく報われたようです。ダビデはヨアブを呼び、後に問題を引き起こすことになる条件<sup>14</sup>が付きますが、彼がアブシャロムをエルサレムに連れ戻すことに同意します。しかし、少なくとも、ダビデは事態を掌握する立場に戻ってきました。

この小さな一場面は、サムエル記に記される必要はなかったでしょう。ダビデはアブシャロムを連れ戻すことを決心した、という一文さえあれば十分だったかもしれません。しかし、それ〔聖書記者がその一文で済ませることができなかった事実〕こそが、その知恵ある女の目的の一部は、ダビデを引きこもりから脱け出させ人生へと復帰させることであったという〔本デラーシャーの〕考えを補強するものなのです。彼女はダビデに解決すべき問題を与え、それを実行させました。しかしその一方では、彼女はダビデに謎かけをして、彼女の言葉に隠された秘密を、あたかも彼が自発的にしたかのように、もっと深く掘り下げさせ、発見させたのです。ダビデに人生を取り戻させた女の何という知恵でしょう！この物語を編んだ語り手の何という芸術的技量でしょう！

---

14 訳注：「彼を自分の家に向かわせよ。私の顔を見ることはならぬ。」(サムエル記下 14:24)